

## 教養文化研究所大3回公開講演会 多様性の大切さ

——日本人と中国人の隣人としての付き合い方——



講師：元ユネスコ北京事務所長 青島 泰之

**司会** 皆様こんにちは。教養文化研究所の竹中です。本日はお忙しい中、本研究所の講演会においでいただきありがとうございます。本日は、長年ユネスコにお勤めになり、ユネスコの北京事務所長を7年間にわたってなさった、青島泰之さんに来ていただきました。青島泰之さんをご紹介します。

私、実はパリに4年ほどおりました。そのとき青島さんもユネスコでパリにいらっしゃいまして、そのときに大変仲良くおつき合いをさせていただきました。今日は、きっととてもおもしろいお話をしてくださると思います。皆様のお手元にレジュメが届いていると思いますが、「多様性の大切さ——日本人と中国人の隣人としての付き合い方——」という題でお話いただきます。今、最も時宜に適したテーマのお話ではないかと思います。学生さんたちの中には中国からの留学生の人たちもいますので、きっとおもしろく聞いてもらえるのではないかと思います。

それでは、もうご経歴は皆様のお手元にあると思いますので、私がここで色々と申し上げるよりも、早速、青島さんのお話に入らせていただきたいと思います。青島さん、それではどうぞよろしくお願い致します。

**青島** 皆さん、こんにちは。今日の講演をさせていただきます青島泰之です。私は肩書きが二つありまして、一つは静岡市の教育委員。もう一つは、日本技術者教育認定機構という、皆さん聞いたことのない機構だと思いますが、大学の工学系の教育プログラムを認定している一般社団法人の専務理事・事務局長です。今日皆さんにお話しするのは、この二つの肩書きでの話ではなくて、私が26年間、国際連合の教育・科学・文化の専門機関であるユネスコというところで働いていた中で、私自身が学んできたことをお話ししようと思います。

今日の講演のタイトルは、「多様性の大切さ」です。多様性というと、先だって名古屋で生物の多様性に関する国際会議がありました。今日お話しするのは、生物の多様性ではなくて、ものの見方、考え方の多様性という意味での多様性です。一般

論としての多様性の話をしたあと、具体的に、日本と一番近い大事な国である中国と日本人の付き合い方を例にとってお話をしようと思います。

竹中先生からこの講演会の話があったときには、尖閣諸島の難しい問題が起きる前でした。皆さんから尖閣諸島の厳しい質問が出ると、果たして答えられるかどうか分かりません。全部で1時間半の講義の中で、1時間を講演に充てまして、残りの30分を質問とディスカッションに充てたいと思います。

私自身がユネスコというところで26年間働いてきて、多様性の大切さというものを学びましたので、まず、皆さんに国際連合がどういうものであるかということを説明したいと思います。こういう順序でお話をすると、青島は、そういうところで働いていたんだなって、皆さんに分かってもらえるかと思っています。

ここにいる方は、私と同じ世代か、あるいはちょっと上の方もいらっしゃるようですが、中学、高校の社会で、国際連盟と国際連合を習いました。国際連盟は英語では The League of Nations 。アメリカの大リーグのリーグですね。国際連合は The United Nations です。国際連盟は第1次世界大戦が終わった後にできた組織で、1920年から第2次世界大戦が終わる1945年まで。実際には、第2次世界大戦が、国際連盟ができてから19年後に起きてしまったので、結局、国際連盟は組織としての役割は19年しかありませんでした。その19年しか役割を果たせなかったという失敗の歴史を繰り返さないために国際連合が第2次世界大戦後にできました。国際連盟の反省を踏まえて作られた組織です。

国際連盟と国際連合の意思決定方法の大きな違いは、国際連盟は全会一致。国際連合は多数決、あるいはコンセンサスといいまして、決は採らないけども、「皆さん、よろしいですか。それでいきましょうね」というコンセンサスで物事を決めていきます。

国際連合には、安全保障理事会という、皆さん聞いたことがある常任理事国と非常任理事国とで構成される委員会があります。常任理事国であるアメリカ、ロシア、フランス、イギリス、中国の五つの国が非常に大きな権限を持っていて、拒否権を持っています。「拒否権」という言葉は実際には文言にはないのですが、この五つの常任理事国のすべての国が賛成しないと、重要な決定はなされないというルールがあります。言い替えると、その五つの重要な国の一国でも賛成しないと重要な決定はなされません。

国際連盟の全会一致は、全加盟国のうち1国でも反対すると決定がなされませんから、結局、国際連盟では、ほとんど何も決定されなかったのですね。

当時一番力を持っていたアメリカのウィルソン大統領が国際連盟を作ろうと提唱したのですが、当時のアメリカには、モンロー主義といってヨーロッパのことに関わらないのだという国の方針、国民の考え方がありました。ウィルソン大統領が提唱した組織にもかかわらず、アメリカの議会はアメリカが国際連盟に加盟することを批准せず、アメリカは不参加でした。世界で一番力を持っていた国が不参加の国際組織ということで、国際連盟は出発をしたときから弱点を持っていました。

どんな決定ができるかという点、国際連合の場合は、ある国に対して制裁をする場合に、経済制裁がありますし、場合によっては、軍事力でもって制裁をすることがあります。それに対して、国際連盟は軍事力の行使はなくて、もっぱら経済制裁、それも、実際には執行権はない、「経済制裁をしましょうね」という感じなのです。軟らかいのです。

この二つの組織の一番大きな違い、国際連盟が第2次世界大戦を止めることができなかつた一番大きな理由は、紛争、戦争はいったん起こってしまうとこれを止めることは非常に難しいですね。国際連盟は、紛争が始まってから、あるいは戦争が始まってから調停に乗り出すという、どちらかという点後追いのことしかしなかつたのです。それに対して、国際連合は紛争や戦争が起こらないような社会、そういう世界を作る方に力を入れていることが大きな違いです。

国際連合には、国際連盟にはなかつた専門機関、例えば UNESCO、WHO、ILO、世界銀行のような専門機関が34ありまして、このうちのほとんどが、戦争を止めるための組織ではなくて、平和を作るための組織です。ちなみに、国連全体の予算を見ますと、いわゆる軍事・政治の部分の予算と、戦争のないような社会を作るための平和構築の予算対人員は3対7です。平和構築が国連の主な仕事です。

国際連合には公用語が六つあります。英語、フランス語、スペイン語、ロシア語、中国語、アラビア語です。公用語は、会議で自分の国の意見を述べるときに、この六つの言葉のどれかで演説すれば、必ずこの他の五つの言葉に訳されて、ドキュメントも訳されて会議が進んでいきます。

では、日本語、ドイツ語、イタリア語はどうして公用語ではないのだろうかということになるのですが、国際連合は、第2次世界大戦の戦勝国が戦後の世界を支配するために作った組織です。日本、ドイツ、イタリアは敗戦国ですから、国際連合の中では正式なメンバーでないと言ってはいけないのですけれども、元々われわれのことは考えられなくて作られた組織と、ここまで言うてしまうとまた問題なのだけれども、要するに戦勝国が作った組織です。みんなが集まって、「さあ、やろう」で

はなくて、戦勝国が戦後の世界を取り仕切るために作った組織なのですね。

では、The United Nations をどのような日本語に訳したらいいでしょう？ The United Nations ができたときに、海外特派員が日本に電報を打ってきます。こういう組織ができた。そのような場合、新聞社や政府が、新しい言葉には日本語の統一訳を決めますが、そのとき、外務省の非常に政治的な方が、「国際連合」と訳しました。ちなみに、中国語では、「連合国」と訳しています。連合国は、枢軸国に対して戦争をした連合国ですね。軍事的な連合国と国際連合は同じ延長上にあるのです。

「国際連合」と聞くと、日本人は、なんかすばらしい、みんなが集まって世界の平和を作るためにできた組織だと思ってしまうのです。日本人が国際連合と聞いたときに、いい気持ちを持つように訳した、政治的な訳語です。

日本政府は、日本が安全保障理事会の常任理事国になろうという運動をしています。イギリス、アメリカ、ロシア、フランス、中国と同じように、日本も常任理事国になりたい。常任理事国でないと、選挙で選ばれない限り安全保障理事会に入れないのです。常任理事国になりますと、選挙運動しなくても、いつもそこで重要な決定に関わられるし、かつ、もし拒否権を持てば、アメリカなどと同じような影響力を持てるということです。日本は、ドイツと一緒に常任理事国入りの運動をしています。日本は、アメリカに次いで国連に拠出をしている。金額的には2番目の国なのですが、常任理事国には入っていない。先ほど説明したように、国際連合は戦勝国が戦後の世界を取り仕切るために作った組織ですから、日本が安全保障理事会の常任理事国入りをするのは、そんなに簡単な話ではありません。日本の分担金は、国連全体の16.6%。アメリカが20%ですから、日本は2番目です。イギリス、ドイツ、フランスは8%~6%ですから、そういう意味では、日本はほんとうに、ナンバー2のお金の面での貢献をしています。

国連職員は全世界で7万人います。そのうち、事務員、秘書でない、国連のいろいろな議案、事業の立案をするプロフェッショナルが2万5000人います。この2万5000人のうち日本人は700人しかいない。分担金が16.6%ですと、2万5000人の16.6%、4,000人ですが、このくらい日本人の幹部職員がいてもおかしくない。けれど実際には700人しかいない。特に上級の幹部職員が少ないことが問題になっています。

国際連合は、平和のための組織です。皆さん、平和といったときに、平和を維持する活動と、平和を作る活動は、大きく違うということを認識してください。平和を維持するということは、紛争があったときに軍隊を送って紛争を抑えて、平和を

持つてくる Peace Keeping です。他方、Peace Building、平和の構築は、先ほども何回も申しましたが、戦争のない世界、平和な社会を作るための活動です。そのために、専門の機関が全部で34、例えば UNESCO、WHO、ILO、FAO、UNDP、UNICEF、世界銀行といった組織があります。

国際連合は、平和を作るためには貧しさを取り除かなければいけないということで、貧しい国に対しての援助、貧しい国が豊かになるための事業を展開しています。それでは、豊かな国、貧しい国は、どのように定義をしたらいいのでしょうか。ちょっと前までは、私たちが小、中学校の頃、1人当たりの GNP をもって、ランキングをしていました。1人当たりの GNP が高ければその国民は豊かであるという考えでしたが、この指標はあまり実態を示していない。GNP のほとんどを軍事予算に使っている国もあれば、かなりを教育や福祉に使っている国もあります。GNP を人口で割った指標だけではその国の実情を反映できないということで、20年ほど前から、国連の UNDP と世界銀行とで、Human Development Index（人間開発指標）というものを使って、世界の国々の貧富のランキングをするようになりました。

この指標は、三つの要素を組み合わせて評価します。一つは識字率。教育の制度がどれだけ整っているか。貧困だと、子どもたちは学校に行けません。子どもたちが安心して学校に行けるような社会になっているか。識字率の高い国ほど豊かな国となります。2番目は平均寿命です。医療が整備されているかどうか。特に、子どもが生まれてすぐ死ぬような国はやはり貧しいということで、平均寿命が下がります。最後は購買力です。例えば、100円でリンゴが1個買えるのか、100円でリンゴが100個買えるかを比較してください。収入が100円であることが重要ではなく、リンゴがいくつ買えるかが重要です。これらの三つで総合評価をします。日本は識字率と平均寿命ではトップクラスです。結果として、2010年の発表によりますと、日本は11位。1番はノルウェーです。

先ほど、国の富のうち、軍事力にどれだけ使っているか、軍事力にお金を使い過ぎていく国はやっぱり貧しく、正しくお金を使っていない国になると説明しました。ここにおもしろい数字があります。兵士の数と教師の数を比較した表です。アメリカが大体、教師と兵士の数が同じ、100対100です。日本は、自衛隊25万人に対して、先生が、幼稚園から大学の先生まで100万人います。25対100です。戦争をしている国は、教師が1に対して兵隊は5倍いるという国もあります。この数字の比較を見ると、豊かな国は、先生が多いということになります。

国の外交には、二国間外交と多国間外交がありまして、日本の外務省が特に中心

になってやっているのは二国間外交です。日本と中国、日本と韓国、日本とインドネシアという外交ですね。それに対して、国連は、1対1ではなくて、みんなで外交していこうということで、この違いがあります。

二国間外交の一番の目的は国防です。日本の外務省の皆さんががんばっているのは、とにかく日本の国防のためにがんばっている。北朝鮮の問題、尖閣諸島の話で、北朝鮮が、中国が、ああいう行動を取るのなら、日本は軍事力を増強してという話がありますけれど、軍事力だけで国が守れるわけではありません。軍事力だけで国を守ろうとするのは、一番愚かな、一番お金がかかるやり方です。一番いいのは、隣の国と仲良くなることです。そのために、日本は、特に、軍事ではなくて、経済援助を通じて、周りの国の不安を取り除いて、日本と仲良くなるための外交をしています。

国連による多国間の援助は、地球規模の問題、環境、人口、エネルギー、食糧、水、難民、人権問題、教育、文化などの分野で1国1国ではできない問題を、多国間議論という枠組みでやっています。日本政府も国連を通じて支援しています。

ちょっとデータは古いのですが、平成17年度の日本政府のODAの予算のうち、二国間援助に使われている金額が1兆2,000億円、多国間は2,460億円で、圧倒的に、日本のODAは二国間で行われています。

私が26年間働いていました国連の組織の中のユネスコについてお話をしたいと思います。このユネスコの話をしながらか、徐々に多様性の話に入っていきます。ユネスコは、英語で The United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization。頭文字を取って UNESCO になります。戦後、1946年に設立されました。国際連合が設立されたのとユネスコが設立されたのは、ちょっと別の歴史的な経緯があります。第2次世界大戦中に、ヨーロッパの教育大臣が「もうじき戦争は終わるだろうけれども、この戦争中に教育が、文化が、ものすごく破壊された。戦後、それを立て直すための組織を作ろうではないか」ということを、ロンドンに集まって議論しました。そのとき、広島と長崎に原爆が落とされました。科学も入れなければ、ほんとの意味での平和は来ないのではないかとということで、ユネスコは教育と科学と文化の組織になりました。

ユネスコの憲章の前文に、「戦争は人の心の中に生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」という文章があります。これはまさに、教育と科学と文化を通じて、皆さんの心の中に、平和という砦を作っていこうというメッセージです。

日本は、1951年にユネスコに加盟しました。国連加盟は、その5年後の1956年です。サンフランシスコ条約で、日本は連合国と戦争状態を終えて、平和条約を結ぶのですが、ユネスコに1951年に加盟したときは、まだ日本はサンフランシスコ条約に署名してなかった。ユネスコは、戦争を起こした日本であっても、われわれの組織に入れて、これから一緒にやっという事で、加盟を許しています。ところが国連の方は、ソ連が安全保障理事会でずっと拒否権を発動して、日本は加盟することがならなかった。56年に、ソ連のほうも自分の陣営の国を加盟国にしたいという駆け引きがありまして、日本は56年にやっと入れた。

日本にとっては、国連に加盟することは夢だったのですけども、それがなかなか果たせないときに、一歩先んじて、ユネスコは日本を戦後初めて国際社会に迎えてくれた。そういう、日本人にとっては非常に大事な、歴史に残る出来事だったということ、自慢するわけではないのですけれども、そう思って聞いてください。今、世界の193か国、ほとんどすべての国がユネスコの加盟国になっています。

ユネスコの事業のうち、教育の分野では、EFA、これ聞いたことありますか？ Education for All。万人のための教育です。先ほど識字率の話をしました、世界の全ての人が、読み書きができるような教育をしようという事業です。それからESD。これは、今日講演テーマである多様性に関係する非常に大事な事業です。ESD、持続発展のための教育は後ほど詳しく説明します。

科学では、人間と環境。それからIOC、これはオリンピック委員会ではなくて、政府間海洋委員会という国境を越えて世界の海洋の資源、環境データ、災害監視のネットワークを作る委員会があります。

文化では、皆さんご存じの世界遺産。ユネスコの大きな事業です。世界遺産は、文化遺産と自然遺産と二つありまして、文化遺産は、主として、ハードな物、建物、お城、遺跡とかを対象にしている文化遺産です。最近有名になってきた無形文化遺産もあります。無形文化である言語、生活様式、お祭り、舞踏、演劇とか、物理的形でない文化の遺産を守っていく事業です。

持続可能な発展のための教育、Education for Sustainable Development、頭文字を取ってESDと言っていますが、この説明をします。ESDは、2002年にヨハネスブルグの世界首脳会議があったときに、日本の小泉首相が提案した日本の提案です。2005年から2014年を国連ESDの10年と決め、ちょうど今年がその折り返し点です。10年の事業を展開するにあたり、ユネスコは教育専門機関ということで幹事機関になりました。

ESD って何だろうか？ 環境，経済，社会の面において持続可能な将来が実現できるように，価値観を変えよう，行動様式を変えようという，そういう教育です。そのためには，持続可能な社会づくりの担い手を作らなければいけない。それは，強制して，「これをやれ」と言うのではなくて，教育によって意識を変えようという試みです。20世紀は，地球の資源は無限だと思って，石油をどんどん採って，いろんな資源をとにかく使っていくという，そういう世紀だったのですけども，21世紀は，そうではなくて，地球の資源は有限なのだ，そういう考え方をわれわれ持たなければいけないということです。そういう意識改革ですね。それを教育によってやろうということです。

そのために，具体的には環境教育も大事ですし，それからエネルギー教育もありますし，それから国際理解。この国際理解，あとで説明しますけども，自分だけよければいいのではなくて，他の人がどういう状況にいるのだろうかということも考えなければいけない。どういうふうに他の人のことを考えているかを，いつも念頭に置かなければいけないという国際理解教育。そのためには文化を理解することです。文化はすごく大事なのです。文化通じて意識改革をしていこう。先ほど言いましたが，ESD の担い手作りが大切です。われわれはもう年取っていて，教育されても，もう遅いのですけども，特に若い小学生，中学生を教育して，その人たちに数十年後に持続可能な社会作りの担い手になってもらう。

この持続可能な教育を説明するのに，おもしろい本があります。世界全体を100人の村に例えます。と，どんなふうになっているのでしょうか。日本は，ほとんどわれわれは日本人で，宗教も多分9割くらいが仏教徒で，皆さん同じテレビを見て，同じ言葉をしゃべって，大体同じ構成になっていますが，世界は全然そうになってないのです。だから，私たちがこれから持続可能な社会を考えたときに，日本の中だけを考えるのではなくて，世界がどうなっているかを見ていただきたいということです。これからの私の話は多様性の話にだんだん結び付いていくのですけれども，この100人のうちの61人がアジア人です。あと，アメリカ，アフリカ，ヨーロッパ，オセアニア，こんなたくさんの人種が，一つの村の中に住んでいる。当然，男女比は1対1。

宗教はどうでしょう。日本はほとんど仏教徒で，あとはキリスト教だとかありますけども，ほとんど仏教徒です。村は33人がキリスト教で，あとイスラム，ヒンズー教，仏教，その他の宗教。無宗教が16人います。

言葉はどうでしょう。中国語が16人，スペイン・ポルトガル系が10人，英語が9

人ときまして、日本語が2人。あと、39人が、これ以外の言葉をしゃべっています。今、世界で、言語がいくつぐらいあるかご存じですか？ 大体7,000あります。ある言語は、もう今、100人ぐらいしかしゃべれない言葉もありますけども、全部で7,000ぐらいの言語があります。

生活状況はどうでしょう。6人が村の66%の富を保有しています。17人の女性と8人の男性が、1日1ドル以下の貧困な生活をしています。100人のうちの80人が水準以下の住居に住んでいます。50人が欠食です。

教育水準はどうでしょう。17人が読み書きができません。学校に行く機会がなかった。大学に行っているのは1人だけです。6人の子どもが、子どもは、5歳から15歳の本来学校に行っていなければいけない子どもたち、労働をしていて、そのうち3人はフルタイムで仕事をさせられている。この3人のフルタイムで仕事をしている子どもは全く学校に行っていない。

女性の状況はどうでしょう。70%の村の労働は女性が担当しているのにも関わらず、10%の所得しか女性に払われてない。これ、もしかしたら、日本も似たような状況かもしれませぬ。

世界はこういった状況にあるということを認識して、ESD、持続可能な社会を作ることを考えていただきたいと思います。日本のことだけを考えたESDではなくて、地球全体のことを考えて、持続可能な社会を作っていこうということがESDの目的です。

今までは、ちょっと漠然とした話だったのですが、中国と日本の話をしたいと思います。中国人と日本人の隣人としての付き合い方です。中国人と付き合うのに、いろいろ分野があります。政治の分野、軍事の分野、経済の分野、学者の分野、文化の分野、民間の分野、いろいろあります。いろいろな付き合い方があります。全てを網羅して、日本人と中国人の付き合い方はこうあるべきだということを述べるつもりはありません。私がユネスコというところで働いてきた、特に中国に6年半いたのですが、その経験を踏まえたお話をしたいと思います。

その前に、おもしろい話を二つ紹介させていただきます。一つは、これ、分かります？ 「共産党幹部指導社会主義市場経済」。これ、中国語ですね。ところが、この「共産党」も「幹部」も「指導」も「社会主義」も「市場経済」も、中国語ではないのです。日本人が作った中国語なのです。でもこれら、中国で使われています。

中学か高校のときの世界史で習ったでしょう。漢字は、5世紀に、百済の王仁(わに)博士が、中国の漢字を日本に持ってきました。当時、日本語には文字がなくて、

日本の指導者が、中国の漢字を使って日本語を表現しようと決めました。その漢字の一部を取って、ひらがなとかカタカナを作って、日本語を完全に表現することに成功しました。漢字を導入したときから、日本は、大きな意味で、中華文明の傘の中に入りました。今から150年前に、日本が鎖国から開国したときに、ヨーロッパから、アメリカから、ものすごい量の新しい概念、言葉が入ってきました。それを、どう訳そうか。今だったら、インターネットだったら、カタカナで「インターネット」とするのですけれども、当時の、幕末、明治の人たちは、漢字の熟語を組み合わせることで新しい言葉を作ることによって、新しい概念を表わしていこうという努力をしました。

中国はその数十年後に日本と同じ状況になって、国を開いて西洋から新しい概念を入れるときに、同じ問題に直面しました。そのときに、もちろん彼らも自分たちで、新しい言葉作ったのですけれども、ふと横を見たら、日本人が30年前に結構うまいことやっているなあっていうことで、当時の中国人は日本の漢字熟語を輸入しました。日本人が作った1,000ぐらいの言葉が、本来、中国にはなかったにもかかわらず、中国で日常的に使われているのです。この話を中国人の若者にしますと、「そんなばかなことがあるか。これらは、むかしからあった私たちの言葉」と言います。例えば、人権、金庫、特権、哲学、科学、環境、医学。中国の古い文献を見ても、こういう言葉、単語はないです。日本人が作った言葉ですから。独占、交流、特許、否決、表決・仲裁、見習、仮設、これらもそうです。

日本人は、こういう新しい言葉を作るときに、漢字は、二つ以上の文字を合わせて熟語にすることによりいろいろな意味ができるというルールを踏襲してやっているのです。例えば、「解放」は、同じような意味の漢字「解」と「放」を持つてくることによって、その微妙な違いを作っていく。「供給」もそうです。同じような単語ですね。「方法」もそうです。「階級」もそうです。「動員」は、員数を動かす、目的語と動詞をくっつける。それから、新しい概念「自由主義」、今の中国にはないですね。「治外法権」、「自然淘汰」、「唯物史観」、こういう全く新しい言葉は、日本人が作ったのです。

それから、もう一つのおもしろい話。この写真は青銅の鏡です。古代中国は青銅器の時代がずっと長く続いて、貿易は、中国の周辺の国々が、貢ぎもの、朝貢貿易というのですが、周辺国の王がその国の特産品を持って行って皇帝に差し上げるという形の貿易です。そうするとその見返りに、皇帝が周辺国の王にお返しをするという、そういう貿易をしていました。そのお返しの中に、この青銅の鏡があります。

非常に貴重なものです。これを作るには大変な技術が要るので、これを周辺国の王にお返しとしてあげました。卑弥呼も100枚ぐらいもらったという記録があります。これは京都と兵庫県で出土した鏡の話です。鏡に景初4年という銘が打ってあった。景初4年は西暦240年に相当しまして、これはちょうど、「三国志」に魏という国がありました。魏の国に景初という年代があります。これは西暦の237年から239年です。実際は3年しかなく、西暦の240年は、正治元年です。景初4年は中国にはなかったのに、この鏡には景初4年と銘が打ってある。この鏡は、多分、日本で生産されたのではないかという学説があります。中国の鏡という最高級のブランドを、日本がもうすでにそれをまねする技術を持っていたという、そういう話です。

次に今の中国のお話をしたいと思います。40年前、鄧小平が、中国を経済発展させるのに、中国全体を等しく発展させようとする100年、200年もかかってしまうということで、彼の考えたのは、とにかく上海、上海デルタ、沿岸部ですね、あの辺を集中的に経済発展させる。何十年かたったら、そこが他の中国の部分を牽引車で引っ張っていくのだと。そういうことを鄧小平が決めまして、結果として、今の上海、あの辺のものすごい経済発展があります。鄧小平のあとの10年の江沢民政権は鄧小平のやってきた路線をそのまま引き継いで、沿岸部の経済発展に力を入れたのですけれども、内陸部の経済発展には力を注いでこなかった。今の胡錦濤政権が8年目に入って、あと2年もないのですけれども、胡錦濤は、この格差を、内陸と沿岸部の格差を縮めなければいけないということでがんばっていますが、そう簡単な話ではなくて、内陸部はどんどん遅れていく、沿岸部はどんどん発展していくという、国の中でものすごい格差ができてしまった。

もう一つの中国の問題は、中国人口の13億のうち8%、ほぼ1億の人口が少数民族です。中国には、全部で56の民族、漢民族と55の少数民族がありまして、8%が55の少数民族です。この少数民族はほとんど辺境地帯に分散してしまっていて、チベット、ウイグル、蒙古、朝鮮族などがいます。ここが、やっぱり経済的に遅れているのです。教育の面でも、医療の面でも遅れています。

この少数民族の問題と、先ほどの沿岸部と内陸部の経済格差の二つが重なって、中国は大変な状況にあります。当然、貧しいところから豊かなところに、国内移民という出稼ぎ労働者が流れるのですが、この数が1.6から2億人。日本の人口を超えるくらいに貧しい内陸の人が都会に出てきて、非常に劣悪な状況で仕事をしているという状況があります。

中国は、共産党による一党独裁の国です。民主主義の国ではないです。中央政府

には、首相、教育大臣、教育省とかありますね。それから地方には、地方政府がありますね。ところが、例えば「北京市で一番偉い人は誰ですか」と聞いたら、北京市長ではないです。一番偉いのは、北京市の共産党書記です。清華大学に行きますと、一番偉いのは学長ではないです。偉いのは、そこにいる共産党書記です。首相よりも偉いのは9人いますよね、共産党幹部が。序列1番は共産党総書記です。この共産党のリーダーが一番偉いのです。首相よりも偉いのです。そういう意味で、中国は共産党が全てに優越する組織です。ある人が言いました。「中国の軍隊は、中国の軍隊じゃなくて、共産党の軍隊だ」。中国の悪口を言っているのではありません。中国は共産党による一党独裁の国だということ覚えていてくださいと言っているのです。一党独裁で民主主義でない国は、やっぱり幹部による汚職があります。中国では、共産党の幹部、政府の幹部が汚職をすると死刑です。それでも、汚職はなかなか止まらない。そういう状況にあります。

それから、報道の自由が、本当に中国にあるのか。「国境なき記者団」という世界のNGOが、毎年173の国をランキングして、報道の自由度を示します。一番下は北朝鮮です。北朝鮮の報道の自由が一番悪い。中国は、なんと下から7番目です。日本はいくらだったかな。日本は29番目だったと思う。日本もそんなによくありません。いいのは、北欧の国です。アメリカも、それほどよくありません。皆さん、日本は、言いたいと言え、自由なと言え、と思っているかもしれないけれども、入ってくる情報がコントロールされていると、やっぱり考え方もそっちの方に持っていかれてしまうのです。報道の本当の自由は、いろんな意見を報道してくれて、それをわれわれが判断して、また、われわれが発言する。そういうサイクルになれば本当の自由があるのですが、日本の場合には、言いたいことは結構言えると思うのですが、本当の意味で正しい情報が入ってくるかは、必ずしもそうなっていないと思います。

中国ではインターネットを国が、共産党がコントロールしているということを、皆さんだいぶ分かってきていると思います。私が北京にいた時の話ですが、外国のテレビは観られます。観られるのですけれど、観ている途中で、あるとき、スポーンと真っ黒になったことがありました。北朝鮮に関するニュースのところ、列車が爆破されたことが報道されました。CNNのニュースだったのですが、バサッと真っ暗になりました。ということは、政府がそれを監視していて、その情報が国民に流れると、爆発が起こった時点で、何が原因で起こったか分からないわけですが、もしかしたら政治的なテロだったかもしれないし、中国に対する攻撃だったか

もしれないということで、とにかく、サッと画面を落としてしまう。そういうコントロール、一説によると、そういう情報のコントロール、インターネット、電話の盗聴ももちろん含みますけど、情報を監視する人が15万人働いているということを聞いたことがあります。

ユネスコは毎年ジャーナリストに賞を出しています。今から15年ぐらい前に、あるジャーナリストに、ユネスコが賞を与えました。最近のノーベル平和賞と同じで、そのジャーナリストもそのとき刑務所に入っていました。刑務所に入っている人にユネスコが賞を与える。中国政府は怒りました。「われわれの犯罪者に対して、ユネスコは賞を与えるのか」。私が所長でいたときも、似たような問題がありました。今から7、8年前に、SARS という伝染病が拡がって、中国人が2,700人ぐらい死にました。日本人は1人も死ななかつたのですけれど、中国はいろんな動物等を食べる習慣があつて、それが原因なのか、この病気に罹って2,700人の方が亡くなりました。中国は、当時、それはもう国中がパニックになってしまい、もしかすると中国人全員がSARSで死んでしまうのではないかと思ったほどでした。中国政府は、病院にどれだけ患者がいて、何人死んでいるかという正しい情報を流さないのです。それに対して、あるジャーナリストが、「これを正しく報道しなかったら、とんでもないことになってしまうぞ」ということで、彼は自分が得た情報を、外国のメディアに流しました。中国政府は、そのときに、こういう社会不安に対して変なデマが出るともって国が混乱するので、患者が何人出た、何人死んだという情報は国がちゃんと出すから、ジャーナリズムは一切出すなという法律を作りました。それに対して、ジャーナリストは、「そう言ったって、政府はうそを言っているから」と言っ、自分で情報を出して、やっぱり刑務所に入れられました。その人に対して、ユネスコは賞を与えたのです。

今回のノーベル平和賞も、同じようなことです。中国の民主化に対して意見を言った人を刑務所に入れて、それに対して、ノーベル平和財団がノーベル平和賞与えたということで、中国はまだまだ、情報とか、民主化に対しては、乗り越えなければいけない山がたくさんあると思います。

北東アジアの平和についてお話したいと思います。今、北朝鮮と尖閣諸島で、いろいろと問題が出てきました。実は、このスライドを作ったときは、そういうことはまだ表に出ていなかったもので、私は、北東アジアは随分平和なところだと思ってスライドを作っていました。北東アジアは、世界の他の地域と比べるとずいぶん平和です。例えばヨーロッパの歴史を見ますと、絶えず戦争をしています。ヨー

ロッパは20世紀になっても特に2回の大きな大戦をしたし、宗教戦争、侵略戦争、民族戦争、もうずーっと、世界史の年表見てください、ヨーロッパいつも戦争していた。今でも戦争していますね。それに比べて、北東アジアは、ほんとに戦争のない地域でした。中国5,000年の歴史の中で、中国は軍事力によって中国の覇権を得るのではなくて、中華思想とか文明によってこの地域を支配するという、そういう大国だったのです。

ちょっと話が飛びますが、中国の4大発明、紙と印刷技術と羅針盤と火薬ですが、この火薬について、これは、ちょっと冗談、ジョークで話を、私が中国人に話をすると、中国人がすごく喜んでくれるのですが、中国人は火薬を発明しましたが、それを見て、ヨーロッパ人は兵器に使った。中国人は花火に使った。

中国はずっと軍事国家ではなかった。日本の平和を考えたときに、この中国という大国、隣国の大国が、日本に攻めてきたことがあります？ この日本と中国、付き合い2,000年の中で、1回ありますよね。元寇、蒙古が攻めてきました。だが、あれは漢民族ではありません。あの当時、中国は、蒙古によって征服された国。その蒙古人が日本に攻めてきた。漢民族が日本に攻めてきたこと、1度もありません。

やっぱり日本の平和、当然、島国であったということで、国防しやすかった。

もう一つは、中国と日本のある朝鮮半島にいる朝鮮族は、これがまた中国人に輪をかけて、戦争をしない国です。朝鮮族が日本に攻めてきたこと、1度もないです。ところが、日本人は攻めている。秀吉のときに攻めている。それから日清戦争、日露戦争、日韓併合、日中戦争。そういう意味では、北東アジアの平和は、日本人以外は、本来は戦争をしない民族の地域です。

そうは言うものの、最近の中国は、やっぱりちょっと注意しなければいけない。2008年の世界の軍事費。総額が1兆4,000億ドル。アメリカが突出してしまっていて、中国が2番目です。中国の軍事予算は、本当はもっとあるのではないかといわれていて、例えば軍備の開発費は、どうもここに入れていないらしい。先日、天津の軍事関係のセンターが、世界ナンバーワンのスーパーコンピューターを作りました。その費用もこの軍事予算に入っていないと思う。中国は今までソ連との国境で軍備を配置しなければいけなかったのが、その必要がなくなってきた分、これを海軍力に回してきた。それで今、フィリピン、ベトナム、もっと向こうまで海軍力を使って領土を拡張しようとしています。尖閣諸島もその一環でしょう。航空母艦を造ったり、潜水艦をたくさん造って海軍力を増強してきていることは、やっぱりわれわれ日本

人は注意しなければいけない。中国は、先ほども申しましたように、何千年の歴史で、あんまり軍事力を使って外を侵略してこなかったと申し上げたのですけれども、中国共産党はちょっと違うなと思うのです。今までの中国の王朝とちがうのですね。そういう意味では、歴史的には非常に平和的な国だったけれども、今の共産党は心配だなあ。やっぱり注意していたほうがよろしいと思います。

あと25分ですね。あと25分ありますので、最後に私の結びをしまして、講演を終わらしていただいて、あとは質問、ディスカッションに移りたいと思います。

多様性をもった考え方で、中国との付き合い方を考えるときに、私たちは、日本人だけの見方ではなくて、中国人の見方に立って考えなければいけないということです。日本人が忘れてはいけないこと、二つあります。一つは、唐の時代に、ちょうど唐の時代は、日本がこれから国をつくっていく時期だったのですけれども、そのときに、日本は、中国から膨大な文化、制度、学術を学んでいます。遣唐使が行っていろいろな技術、文化を持ち帰ってきた。鑑真和上がいましたね。唐招提寺を造った。あの方は自分1人で来たのではなく、仏教だけで来たのではなくて、そのときに、50何人だったですか、いろいろ技術を持った専門家を連れてきてくれました。歴代の王朝の中でも最も開明的な唐王朝が、周辺国に、「どんどん来なさい。自分たちのいいところを持っていきなさい」と言ってくれた。唐王朝と、日本がこれから国をつくろうという飛鳥・奈良時代にちょうど会ったのは、日本にはすごくラッキーなことでした。これを、日本人は絶対に忘れてはいけないと思います。それがなかったら、今の日本の発展はなかったですね。どこかのアジアの国の、いまだに発展途上国の状態であったかもしれません。

二つ目。日本が中国を、つい先だって、植民地化しようとしたこと、これは絶対に忘れてはいけないと思います。1年ほど前に、航空自衛隊の幕僚長が、「あれは侵略戦争ではなかった」なんてことを言っていました。そういうことを言うこと自体が問題です。厳然たる事実として、日本は中国を植民地化しようとしたということを、私たちは、中国人と付き合うときに、常に頭に入れていなければいけないと思います。

中国では、いまだに反日教育をしています。日本の首相が中国を訪問するたびに、「日本は謝ってないじゃないか」と言われる。日本の首相は21回謝っています。謝っているのです。でも中国人は、「謝ってない、謝ってない」と言ってきます。

田中角栄が、日中平和条約を、35年前かな、署名しました。その晩さん会で、「調印して、よかった、よかった」って、横にいた周恩来か鄧小平かに、「これで中国人

は、戦争のことを忘れてくれるかな」って言ったら、「いや、中国人は1,000年忘れない」と言われたそうです。日本人はすぐ忘れちゃうのですが、中国人は1,000年忘れない。ただ、中国人は1,000年忘れないけれども、日本と仲良くしていくことは大事だと、そこで平和条約を結んだ。

最後に、これは多様性の結びで、私自身の経験をお話しします。カルチャーショックについてお話ししたいと思います。カルチャーショックは、自分と違うものに接したときのショックです。この世界地図は皆さんご存じの世界地図で、私も、小学校、中学校、高校、この世界地図で世界を見ていたのですが、私は23のときスイスに留学しました。初めてパスポートを申請して、生まれて初めて飛行機に乗って、スイスに行きました。呼んでくれた先生に会う時に、待合室で私が見た地図には、日本が真ん中にないのです。地球は丸いので、いろいろ地図の作り方があつたことは、頭では分かっていたのですけれども、その世界地図で、日本が極東の一番右側にあるのを見たときは、これ、すごいカルチャーショックでした。その時に、私は、自分が今まで日本で勉強してきたことは、もしかしたら世界のスタンダードではなかったのかな、と一度思ひまして、日本で勉強したことを横に置いて、ヨーロッパ人の考え方をまっぴら勉強して、しばらくしてまた、日本で自分の学んできたことを一緒にくっつけて判断していきました。そういうカルチャーショックがあつたこと、非常に貴重な経験だつたと思います。

これで、私の講演を終わらさせていただきます。

**司会** どうもありがとうございました。例えば国連のお話、私も国連についてはものすごくよく知っているつもりでございましたけれど、今日、青島さんのお話を伺って、随分新しいことを勉強させていただきました。それから、色々質問もございましたが、きっと皆さまもいっぱい質問がおありになると思います。また質問だけでなく、中国の留学生の皆さんもいらっしゃいますから、ご意見もおありになるかもしれませんね。どうぞ自由に、挙手をなさって、ご発言いただきたいと思います。何かご質問おありになりますか。どうぞ遠慮なさらないで質問していただきたいと思いますが、いかがでしょうか？

私はいろいろなことを思つてお話をうかがつていました。最近いつも思つてることがあります。中国という国は全然攻めない国だと言われて来ましたが、このところ、ちょっといろいろではないか。結局、これは、共産党というものが、ソ

連も、ずっと長いこと共産党でしたが、ソ連と比べるのもちょっと無理もあるかもしれないけども、やっぱり共産主義というものの性質が、そこにあるのでしょうか？

**青島** 私は、今の中国の共産党政府は軍事政権だと思います。日本の古代は公家社会で、鎌倉時代から軍事政権になって、秀吉のときに、軍事政権です、朝鮮を攻めました。それから明治維新以降、やっぱりこれも軍事政権です。軍事政権の国、文民ではなくて軍人が政権を握っている国は、やっぱり軍事行動を取りやすいです。共産主義とは別じゃないかというふうに思います。

**司会** だから今、中国は、大変な軍事国家である、とこういうことでしょうか。

**青島** 軍事国家というより、軍事政権ですね。

**司会** 皆さま、何か質問おありになりませんか。はい、どうぞ。

○ 誰も質問しないんで、質問するんですけども、9・11が起こったときに、アメリカの、アメリカ人はもう、「やっつけちゃえ、やっつけちゃえ」って戦争やったんですけども、私、日本人で、アメリカが、「あ、どんどん戦争やっちゃう国なんだな」って思っていて。そうしたら今度、尖閣諸島の問題が起こったら、管さんのやり方は生ぬるいと、日本はブッシュを応援するような感じで、世論はそういうふうに向かっていた。9・11が起こったあとに、オノ・ヨーコっていう人が「イマジン」の1行広告を出したんです。「やるなあ」と思って。でも、あれはたいした効果がなかったんです。

今回も、尖閣諸島の問題があると、要するに、日本人は、戦争をやれ、やれっていう、毅然としろっていうのは、万が一でも戦ってもしようがないっていうふうには僕は感じたわけですけど、日本人の世論を。そういうときに、今の世の中は、ブッシュみたいな方向に、ブッシュを応援するアメリカ人みたいに日本人もなっちゃうし、中国の人もなったんじゃないかと思うんですけども、そういうときに、ユネスコの精神が、どうやって、オノ・ヨーコみたいなやり方を取らなくちゃいけないと思うんですけども、日本にどうやってユネスコ精神を広げたらいいんでしょうか。

**青島** 難しいですね、これは。戦争するというのは勇ましいのですが、尖閣諸島を確保するために、北方領土でもいいのですが、北方領土はロシアに不法占拠されていますよね。もう一度戦争しなかったら取り返せないです。平和交渉では絶対取り返せないです。沖縄は、佐藤首相が賢くて、戦争しないで沖縄取り戻して、それでノーベル平和賞もらったと言われています。

皆さん、もう一度戦争して、何百万人の日本人を殺します？ そういうふうに思っていたきたいのです。戦争するとかっこいいですけど、みんな勝つと思って戦争するのですが、必ずしも勝つと限らない。勝っても、ものすごい犠牲があります。ユネスコの答えにはなっていませんけれども、私は、絶対、戦争反対です。

**司会** ちょっとよろしいですか。私も戦争は絶対反対ですが、一方で、国を守るということについては、もっと日本人はしっかり考えて、意識を持つ必要があるんじゃないでしょうか。この間の尖閣諸島の問題も、日本は実効支配しているんですから、あの島を。実効支配していますけれどきっと何かしたら、中国から苦情が出てくるだろうということなのでしょう。この間、メドベージェフが択捉に行ったからと日本の人たちが色々言いましたけれど、言ったって、来るものは来るわけですからね。逆に日本も、きっと中国が何か言うでしょうけれども、魚釣島にやっと灯台一つ建てているだけで、元々あそこは鰹節工場があって、人が住んでいたわけですから、あそこにもう少し何か、まあ、私なんか、どちらかという先鋭的なほうなのかもしれませんが、自衛隊の駐屯地一つでも置いたらいいんじゃないかと思うんですよね。核兵器を持つのは、抑止力になるっていう説がある。あれと同じなのではないでしょうか。隣の家のカギが開いているから、隣の人が悪いやつだったら、入ってくるかもしれない。カギさえ閉めておけば、入ってはこない。紳士的に付き合う。それとおんなじ理論があるのではないのでしょうか。軍勢力とは違うけども、防衛力というものがあるのではないかと思うのですが、いかがですか。

**青島** 日本が自衛隊を送ったら、中国、今の共産党だと、軍隊を送ってくる可能性がありますよね。

**司会** 自衛隊っていうのはちょっと極端かもしれないですけど、もう少し、灯台だけじゃない何かを。

**青島** 私は、軍事力によって何かを示すことは絶対必要でないとは言いません。そういうのではなくて、経済協力、文化交流で、仲良くなるのが大切だと言いたい。ああいう尖閣諸島のような問題が出ないように、仲良くすることが一番賢いやり方だと思います。例えば北方領土だって、もしできれば、あそこは、軍事設備はお互いに造らないようにし、研究所を造るとか、共同で研究所、研究センター、一大研究センターにするとかっていうふうな、なんかそういう形で仲良くなればいい。あそこは、日本の領土であろうと、ソ連の領土であろうと、あんまり関係ないと思うのです。そのために、また戦争するかということです。

○ 質問があります。

**司会** はい、どうぞ。

○ 今日の講師の先生のお話、すごく私たちみたいな年取った者に対して、いろいろと分かりやすくお話していただいて、感謝いたしております。

ただ、今、戦争がかっこいいとか、自衛隊をあっちのほうに持っていきべきだとか、私は戦争大嫌いです。なぜかといったら、私は、東京空襲を東京のど真ん中で受けてます。あの戦争の恐ろしさを知らない人が、そんなことを言えると思うんです。私はちょうどその時に学生で、東京の大空襲の、東大の真ん前のところの寄宿舎にいたんですけれども、周り中は火の海になって、校舎の地下室にいたんですけれども、その地下室から出て行って、校庭に行った時に、B29が飛んできて、人が見えると、上から機関銃で撃つわけなんです。そして、地下室に戻るように言われたんですけど、私、戻らずに、そこでずっと立っていました。そして、東京の神田のほうから、浅草のほうから、もう火の海になって、爆弾が落ちるたびに地響きがするわけですね。あの戦争の恐ろしさを今振り返ってみますと、60年たちましたけども、もう、次の日の、焼け跡のむごさ、それから、トラックが、何日かして、死体を運んでいく姿、あんなのを見たら、戦争なんか賛成できません、絶対。

だから、尖閣諸島がどうだろうと、私なんか、そんなことちっとも関係ないような感情で今、生きてますけれども、あんなところに自衛隊なんか持っていったって、どうにもならないと思います。核爆弾が一つ落ちたら、地球が何個か落ちれば破滅っていう時代に、戦争なんていうことをすべきではないと思います。

それともう一つ、われわれは、中国の共産主義に、講師の先生の話の中に3、4

回出てきましたけど、注意すべきであるって言いましたけど、われわれがどういう形で本当に注意していったらいいのかっていうことになる、ちょっと分かりません、正直言って。外交であるとか、それから官僚であるとか、政治であるとか、全てのことだと思うんですね。そういうふうなことを考えると、本当に日本人ってなんかのん気なような気がしますけど、いかがでしょうか。

**青島** 戦争に関する考え方、私と全く同じで、ありがとうございます。

中国の今の共産党政権の話ですけども、この政権があと何年くらいもつかですね。中国の軍事王朝はあんまり長く続いたことなく、蒙古の征服王朝の元も、70年しか続いてない。今の共産党は今60年で、あと10年くらいしかないかもしれませんけどね。私は、個人的には、今の状態の共産党の一党独裁は続いていけないと思います。そのときに、バサッという形で崩壊するのか、あるいは今の共産党が徐々に民主化されていって、選挙をして、多数政党ができていく形になるか。個人的には、そのほうが良いと思います。そうしないと、ある日突然崩壊すると、ものすごい難民が日本に来て大変です。だから、私たちとしては、中国が、ゆっくり民主化していって、日本と同じような国になることを応援するのですかね。一人ひとりが、ああしろ、こうしろと言っても世の中動きませんが、やっぱりわれわれが中国を見るときに、日本は中国のGDPに抜かれてしまったとか、そういうことで見るのではなくて、中国がゆっくりゆっくり民主化していくことを支援する。そういうことを支援する日本の政党に投票する、そういう形になるでしょうね。

**司会** はい、ありがとうございました。ちょっと誤解が無いように申し上げたいんですけど、私は、戦争がいいなんていうことは、これっぽっちも思っておりません。ただ、この日本が今、平和ボケで、平和だ、平和だと言ってはいますが、じゃあ、ほんとに平和なのかっていうことも、ちょっと考えなくては行けませんよ。拉致問題とか、何もできないでいるわけですから。

この60年間、日本が平和であったのはなぜかっていうことは、考えてみる必要あると思いますね。戦争は嫌です。絶対に戦争は嫌です。おっしゃるとおりだと思います。それはもう、ほんとにそうだと思います。でも、その戦争をしないで済むためには、平和を守るためには、どうしたらいいのか。相手の善意だけを信じて、平和がいい、平和がいいって言っていたって、平和が続くわけではないってということも、一方で思っていなければいけないのではないかということが言いたかったんで

す。私たちの国が、この60年間、もう平和ボケでちょっとどうかしていると思うぐらい平和な国になっていますが、それは何のおかげなのかっていうことも考えなくてはいけない。また、こんなふうになったのは、何のせいかっていうことも考えなくてはいけないのではないかと思います。韓国なんていうのは、若い学生さんたちが、今、そこでみんな寝てたりしたような、あなたたちみたいな人たちが、韓国はみんな、徴兵制度で、行くわけですよ。戦争しに行くのではありませんよ。国を守るための訓練をしに行くわけですよ。日本は、そういうこともしないでいられる。それはなぜなのかっていうことも、考えるべきだと思う。戦争をしよう、したらいいと言っているのではありません。でも、日本がここまで平和でいられたのはなぜかっていうことを考えなくてはいけないのではないかと。今後もそういうふうにしていられるかどうかってことも考えなくてはいけないのではないかと。ということは言いたいですね。戦争は、そりゃあ、みんな嫌なんです。絶対嫌なんです。そういう意味では、日本は、第2次世界大戦を、太平洋戦争を始めたときには、大変大きな間違いを犯したっていうのも事実だと思いますね。

ちょっと、司会者がしゃべりすぎてはいけません。失礼しました。ご質問が終わりました。まだ少し時間が。はい、お願いします。

○ よろしいですか。韓国とか、全ての国々では、軍隊、ことに中国なんて、共産主義で、すごい、なんか、もう共産党一辺倒のような形の国になってるというお話も聞きましたけれども、でも、確かに、今日のテーマのように、多様性の大切さは分かりますけれども、それだからといって、徴兵制度がどうの、日本ではその制度がないからって今言ってますけど、徴兵制度がなくても、自衛隊が相当な武力を持っているわけですよ。私、広島の実にも行ってきましたけど、まるで外国に行ったようでした。軍艦がすごい。旅行でちょっと行ったときに、あまりのすごさに、もうびっくりしました。日の丸が全部掛かってる、その軍艦に、自衛隊の。もう、その時に、ほんとに驚きました。それから長崎に行った時にも、長崎もそうですけれども、それから長野もそうですけれども、もう、日の丸がもう、バーッと、掛かっていたりして、ほんとになんか、「これ、日本の国なのかな」と思うほど、自衛隊のすごさ、ほんとにすごいですよ。軍力だってすごいし。だって、今、いろいろ、日本の国の中小企業だって、軍事力の手伝いをしているような工場がいっぱいあるじゃないですか。

**司会** はい、ありがとうございました。前山先生、お願いします。

**前山** 教員の前山です。世界的な問題から、中国と日本との付き合い方の問題までいろいろお話しくださって、ありがとうございました。私、中国を専門としております。学生も参加していて、誤解を与えてはいけないので、ちょっとその点お伺いしたいと思います。

多様性ということで、私も日頃からいろいろ、多様性ということは大切だということをお話しておりますけれども、一つ、お話を聞いていて、中国大陸における漢民族がどのような他民族を制圧していったかについての視点がお話しなされていなかったもので、日本との関係でだけ、侵略をしていない、中国から攻めていないということに触れていらっしゃったので、その点については、中国大陸の大陸の中においては、漢民族は、他の民族、南のほう、あるいは西のほうへ征服をしていった時代があるということは、私のほうから補わせていただきたいと思います。

それから、中国人と日本人がどのように隣人として付き合えばいいかということに対してお話しくださったのが、現在の共産党政権の持っているマイナス面のところでお話しなさったと思いますが、そのマイナス面を、中国の人々は、どのように今、克服しようとしているのかということがあると思います。例えば、ノーベル平和賞を受賞した劉曉波氏に対しては、みんなが、政府と同じように、反対しているわけではない。劉曉波氏の活動に対して賛成しているグループもたくさんいるし、あるいは、行動を起こさなくても、考え方として共鳴している人もたくさんいると思います。ですから、私たちとしては、共産党政権だから、それが軍事政権かどうかということ、それはそれぞれ、講師の方の考え、あるいは今日参加された方の考え、いろいろあると思います。しかし、そうでない、政権を握っていない、それとは関係ない一般庶民の中国の多くの人も、他の考え方でいるのではないかと思います。私たちは、普通の庶民として、中国人とどのように付き合えばいいかという、私はその面を、ぜひ講師の先生からお伺いしたいと思います。

**青島** 質問の主旨は2点あったかと思いますが。一つは、少数民族に対して、中国が軍事行動を起こしていたチベットの例をとります。今、チベットは中国の版図に入っていますけれども、中国の歴史を見たら、チベットが中国の版図に入ったことほとんどないです。中国共産党は「チベットは、中国の固有の領土である」と言っていますが、チベットはほとんど中国から独立です。一度だけ、モンゴルが大きな帝

国をつくったときに、チベットが一時、モンゴルの、大きな意味で中国の領土になりました。そのモンゴルがいなくなって、明という国ができたなら、すぐに、チベットは独立しています。明の次に、清という国ができました。清朝は満州の征服王朝です。満州もモンゴルもチベットも同じような文化を持っていて、むしろ漢民族を征服する側でチベットが関与して、版図に入りました。少数民族としての扱いではなかったですね。清朝が倒れて、中華民国になったら、チベットはすぐ独立しています。そういう意味で、ずっと、歴史のほとんどチベットは独立していたのですけども、中国共産党の政権のときに、これはもう完全に軍事力でもって征服されて、今は中国の版図に入っている。私の言いたかったのは、中国の歴史の中で、中国の歴代の王朝は、周辺国に軍事力をほとんど使ってなかったという意味で言ったのです。

それから二つ目の質問。私は今日、中国の共産党の話をしながら、中国の悪い面をちょっと話し過ぎてしまいました。私は、ユネスコを通じて中国人と付き合い、特に文化の面で付き合いが深かったのですけれども、本質的に私は中国人が大好き、中国の文化も大好きで、初めて中国に行った時は、自分の文化のルーツがそこにあるような感じがして、非常に中国に親しみを持ちました。今日はその話をもっとたくさんすべきでした。私がユネスコで働いてきて中国は好きだろうって皆さんが思ってくれると思ってしまったもので、その話をしませんでした。本質的には、私は、中国人、中国の文化、歴史が大好きです。

**司会** まだご質問もいろいろおありかもしれませんが、学生の皆さんは次の授業に遅れずに行きたい人たちもいるでしょうし、また次の機会にということで、今日はここで終わらせていただきたいと思います。青島さん、ほんとに今日はありがとうございました。

それから、ご来場の皆さま方は、教養文化研究所では、また来年度も2回、できれば3回、このような会を持ちたいと思いますので、ぜひまたふるってご参加くださいますようお願いいたします。今日はありがとうございました。